
ニイヤ と じいじ の 吞気な日常

茅野 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニイヤとじいじの呑気な日常

【ZPDF】

Z0641D

【作者名】

茅野 遼

【あらすじ】

シャムネコと日本猫の雑種「ニイヤ」と、年金生活をのんびり過ごしている「じいじ」の、のんびりとした日常風景のお話。

(前書き)

「**気楽**」に、**気楽**に、**お楽しみください**。

「イヤは一歳半の、ヤンチャなメス猫だ。シャムネコと日本猫の雑種で、まだ生後2ヶ月の頃、高杉家へやつて来た。当時は、片手の上に乗つてしまふ様なサイズだった。

シャムの血を濃く引いており、体全体は茶色がかつたクリーム色。耳と尻尾、4本の足の肘・膝関節から下は、濃い茶。鼻を中心とした顔の中心部分も、濃い茶色だ。

水色のクリクリとした瞳で、ビックリ顔をしている。眉毛の先が、左右一本だけずつ、カールしている。

高杉家の大蔵省・母、政枝が、治療で通つていた近所の歯科医で、患者友達となつた奥様から、授かつてきた猫だ。

長女と父親は、初めて「イヤ」を見た瞬間から、その愛らしさにメロメロになつてしまつた。

……それが、去年の初夏の事だった……。

1

田舎町の住人は、自動車が無いと生活が大変だ。大体の家庭が所有する家屋や土地は広く、普通自動車が、必ず2台は置けるスペースを持つ。庭もある。

更に高杉家には、じいじが楽しみで作った、小さな畑がある。広さは、普通自動車4、5台分、という所だらうか。

長女が母・政枝と共に手入れをしている花壇もあつた。

猫の一

イヤには、住み心地の良い家庭だ。

「イヤは一年半を経過して、中々の筋肉質な体を持つた成猫へと、育つている。 性格は、人の手で育てられた所為か、人間の子供の様な側面がある。 基本は、甘えん坊の気分屋。

ヤンチャな所は子猫の頃と変わらないが、賢い所は余り無い。

跳躍力は中々のモノだが、反射神経は、やや劣るかも知れない。

昔、高杉家に飼われていた先代猫が、ネズミやスズメを狩るのを得意とする機敏な奴だったのに比べても、彼女の獲物は、トカゲや小さな蛇など、少し動作のゆっくりした物が多い。

今日も「イヤは、せつせと畠仕事に精を出す父親の、お邪魔虫となつてゐる。

「これ、駄目だつて、ダメだよ、イヤ！」

言葉とは逆に、じいじの顔は笑つてゐる。

「イヤは、じいじに駄目だと言われば言われるほど、夢中になつてしまつ。

じいじの手が、『ちゃんちゃん』（草を取る時に活躍する文明の利器）で、雑草の周りの土を、軽く掘り返す。 手首のスナップが利いてゐる。 その動きに合わせる様に、周りの物体も動く。

掘り返される土や、雑草の根にくつ付いてゐる土が、じいじの手に持ち上げられ、払われて、へんな生き物の様に空を舞つてゐる。 猫の「イヤの目には、その動きがスローモーションの様に、はつきりと映つてゐる。

……当然、狙つてゐる。『にゃー』と、効果音がくつ付いてきやうな勢いで、猫パンチを放つ。じいじは「イヤに怪我をさせ

ない様に気をつける。『ちゅんちゅん』を振るつ手の動きが、鈍くなる……。

さつきから、その繰り返しだ。じいじの作業は持らない。「ダアメだつて、これ、ニイー！」じいじが言ひ。ニイヤには、通じる訳がない。

「また、お父さん、ニイヤに遊ばれてる」

遅番の出勤前、長女が縁側から笑いながら、その光景を眺めていた。

じいじは一生懸命耕した畠の土に、大根の種を蒔く。バラバラと無造作に蒔いて水をやり、芽が出てくる一週間後を、楽しみにして田を細める。

「イヤは、トイレに丁度良い、柔らかい地面を探している。じいじが作業をひと段落して、呑氣にお茶を啜つて、じいじの努力の跡を自分の欲求に従つて、掘り返す……。『ふうと、ほつとした顔をする。

じいじも、日当たりの良い和室で、番茶と茶菓子に舌鼓を打ちつつ、ほつとした顔をしている。テレビ画面を見て、笑つてゐる。

……数分後。

「やられた……」

畠に戻つたじいじは、ニイヤの所業の跡を見つけて、参つた顔で頭を搔いた。

「イヤは、物置の屋根から距離2メートル弱の、トイレ外の小さな屋根（急な角度で、幅が狭い。素材はツルツルとしていて、滑り台の様だ）への、決死のジャンプを試みる。

障害物となる、虫や鳥が横切り飛んで行く姿が、今は無い。

「らかな日差しの指す、のどかな初冬の一日。

じいじは、今日も畠で野良作業中だ。一月前に蒔いた大根の種から伸びた芽を、間抜きしている。この抜き菜は、政枝の手により、高杉一家の好物へと姿を変える。

細かく切った抜き菜を胡麻油で軽く炒め、醤油で味付けをして鰹節を塗まぶした物を、ホカホカご飯の上に乗せて食べるのが、一家揃つて大好きなのだ。

……今日は、二イヤの邪魔が無い。作業もスムーズに進んで行く。

「イヤは、タイミングを計っている。今日は土地独特の、季節の強風もなかった。

温かく降り注ぐ日差しに、眠気が誘われてきた。タイミングを見ているつもりが、そのまま、丸くなつて日向ぼっこをしたい様な気分に襲われる。

「二イヤー！」政枝の声がした。「動物病院の予約があるのに、あの子は……」と、ぼやき声も後を追つ。

「ニヤヤは、政枝の声で目を覚ました。（いけない、今日のこのチャンスを、逃しては）と、思つてゐるのかどうかは、分からな
いが……。

「ニヤヤは眠氣から完全に復活した。筋肉がピロピロと反応して
いる。

気持ちの標準を合わせて、集中する。空氣が微かに動く。ニ
ヤヤは瞬間的に、位置の屋根を蹴る！『ニヤーー！』と叫つ、掛
け声が聞こえそうだ。

約2メートルの距離を越え、ニヤヤの前足はトイレ外の屋根を捉
えた！……と、思つた。

ツルツル！『ニヤ？！』慌てて、爪を立てる。
けれどトイレ外の屋根の質感は、ニヤヤの爪を受け入れてくれ
ない。

カシュ、カシュ、カシュ、と、爪と屋根が戦う妙に気の抜けた様
な、耳の奥をくすぐる様な軽い音が、ニヤヤの耳には聞こえている。

『ニヤーーヤーーヤーー！』ニヤヤは慌てる。

しかし元々、急角度で幅も狭いトイレの屋根は、バタバタと忙し
なく動くニヤヤの足を引っ掛けられる、隙間も『え』てはくれない。

ズルズル、ドサー！……ニヤヤは尻尾から、見事に落下
した。

政枝が、長女のベッドの上で丸くなっているニイヤを見付けた。
「あんた、今日はもう出してあげないよ」 急いで部屋を出て、キヤリーケースを用意した。

畠仕事に精を出すじいじに、大声で呼びかける。

「お父さん！」 ニイヤを病院に連れて行くから、そろそろ仕度してね！」

「ああ、定期診断かあ」 じいじは作業の手を一瞬止めて、良く晴れた空を仰ぐ。

政枝は原付免許しかもつてはいない。ニイヤを病院へ連れて行く時は、いつも長女か、じいじに車を出してもらひ。長女は今日、仕事に出かけていた。数年前から年金暮らしのじいじは、今日の運転手を引き受けていた。

「わかつたよ」と、返事をして、じいじは呑気のぶけに立ち上がる。

「ニイヤは、不機嫌だ。そつきの落下で尻尾が痛い。不貞寝をしていたのだ。

政枝がニイヤを連れに戻る。抱き上げられかけて、ニイヤは反撃に出た。

『フニーヤ！』（痛いじゃないのさー。触らないでえー）と、言つていいのかも知れない。

「あら？ どうしたのかしら」 何時もの反撃とは様子が違う。ニイヤの長い尻尾を、抱き上げる腕に収め様として、ニイヤが更に暴れる。

『フー！』 威嚇している。

ニイヤの爪は、手先の器用な長女が、定期的にカットしている。爪を立てられても、怪我をする心配は、それ程無い。

「しつぽ、どうかしたの？」まあ、良い。どうせ、定期診断に行く予定だ。ついでに見て貰いましょうと、政枝は余り気にしないで、ニイヤをキャリーケースへ収めてしまった。

定期診断へ向かった動物病院の診察室で、獣医師は首を傾げる。「どうしたんでしょうねえ。原因は分かりませんが、しつぽが脱臼の様になつていいみたいだな……」

レントゲンを見ている。

暫らくして言った。

「痛み止めだけ、注射して置きました。一、二日様子を見て、まだ酷く痛がるようなら、また連れて来て下さいね」

「イヤは、再び不機嫌になる。ちょっと前までは、待合室での患者に、キャリーケースの中から猫パンチを食らわして、少しは気分が晴れていたのに……。

さつきから痛む尻尾を、色々と弄られている。その上、首筋にチクッと嫌なモノを当たられた。この白い服を着た人間は、余り好きじゃない。

キャリーケースへ戻される前に、隙を伺つた。政枝が頭を下げて、自分に手を伸ばす。体を持ち上げられる寸前、白い服の人間が、気を抜いた！

『ニヤ！』と、掛け声がくつ付いてきそうな勢いで、ニイヤは猫パンチを放つてやつた。

……しかし。

爪が出ていない猫パンチは、獣医師には何でもない攻撃だ。そんな事には慣れっこである。

「元気ですね。心配は無さそうです」白い服を着た人間は、

「――」口していた……。

『ウ――ヤア……』 低く鳴いて、負けずに威嚇しようとしているニイヤを、政枝はあつさりと抱き上げて、キャリーケースへ収めなおしてしまった。

「全く、おでんばで大変ですよ」 と、政枝は獣医師に笑つて言った。

結局、ニイヤの遊び相手 兼 ライバルは、じいじが一番良いみたいだ。

じいじの人間としての頭脳レベルと、ニイヤの猫としての運動能力レベルは、数値的に釣り合いが取れているらしい。

その数値の釣り合いは、そこから導き出される一人(?)の行動パターンと、一致している様だ。

今日も、じいじとニイヤは、高杉家の家庭菜園にて、低レベルな戦いを繰り広げている。

《おしまい》

(後書き)

お仕事合意、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0641d/>

ニイヤとじいじの呑気な日常

2010年11月29日13時48分発行